



内陸に於ける新田の開発（第一報）（飾磨郡谷内村 の新村の場合）

伊勢田，豊次

(Citation)

兵庫地理, 3:38-46

(Issue Date)

1954-12

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002205>



内陸に於ける新田の開発 (オ一報)

(飾廣郡谷内村の新村の場合)

伊勢田 豊次

一. 序 言

私は昭和二十七年年度の「人文地理」の生徒諸君のリポートの一部に、飾廣郡谷外村、同郡谷内村、印南郡別所村、の新田村についての記事に接し、大いに興味を感じ、私のかねて調査中の「三角州に於ける新田の開発」と対比し乍ら研究すれば、一層価値多きものと思ひ調査項目の一つに入れていましたが、幸い今夏の休暇中に寸暇を得てその一部、飾廣郡谷内村の新村、即ち、清住新、大釜新、北野新及び小原新について調査することが出来たが、勿論極めて皮相的なべつ見の程度の概報であるがオ一報として報告したい。

尚、詳細は今後の調査にまつ点の多いことを御了承下さい。

(地理調査所、地形図 二万五千分の一 笠原図幅 全五万分の一)
龍野、姫路、北條、高砂 の五図幅を参照されし

二. 新 田 村 の 分 布 と 概 観

前記の飾廣郡谷内村、谷外村、印南郡別所村の各新村についてみるに比較的相接近した位置にあるので、早速地理調査所の五万分の一地形図にて図上調査したところ、新しい図幅では既に集落名の「新」が剣によりとられているのに対し、明治二十六年及同二十九年測図、同三十六年修正測図の「高砂」及び、明治二十六年及び同三十年測図、同三十六年修正測図の「北條」の二図幅によると、オ一図の枠に、新村(新田村又は新畑村)と思われる地名が得られた。

(もつとも地名のみから、かゝる判断をすることは誤りをおかす恐れが多いことは、既に先学の度々指摘されたところであり、私といへども地名のみから決定的な断定をする気は勿論ないが、之から調査する一応のめやすとして、新田村ではないかとの疑いを持つことはゆるされよう)

さてこれらの新村の自然環境、特に地形的位置を見るに、飾廣、印南、加西、の三郡界をなす200-300米の丘陵柱山地で、山地の縁辺及び谷底、谷頭等を開発したものである。

各新村の地形的位置の詳細については何れ今後一層精査の上、報告したいと思つている。

三. 谷 内 村 の 新 村

(A) 分布と其の地形的位置の概観(オ二図参照)

本地域は市川下流と加古川下流の中間にあり、飾廣、印南、加西の三郡界をなす200-300米の解希された丘陵柱山地で、数條の構造谷により斜断せられ、河川は更に頭部浸蝕により、山地に小支谷を刻んでいる。谷内村は本地域の西北部を占め、本地域に於ける最も著しい天川の構造谷が村の随々中央を東北より西南に通じている。之は西南日本に多い東北-西南方向の構造谷の一つと思われる。天川は現在では谷外村豊國より花田村上原

その谷の奥に位置している。この二新村は隔絶性の強い地形的位置にあり、隠田村的な開拓経過を有することは後述の通りである。之に対し大釜新は本村と清住新との間にある230余米の丘陵性の小山地の北側の山麓斜面に位置し、北野新は小原—大釜—笠置口により囲まれたる240余米の丘陵性の小山地の西側の断々中央をしめる小支谷内に立地し、何れも前面にこの地域としては稍々広い天川の谷底をひかえている。前の二新村程隔絶性は強くはないが、新村にありながら朝日をうけない山地の北斜面又は西斜面に位置し、小原—八重畑—山崎—清水等谷内村の他の古村が、何れも朝日のうけ易い山地の東斜面又は南斜面に立地しているのと著しい対照をなしている。

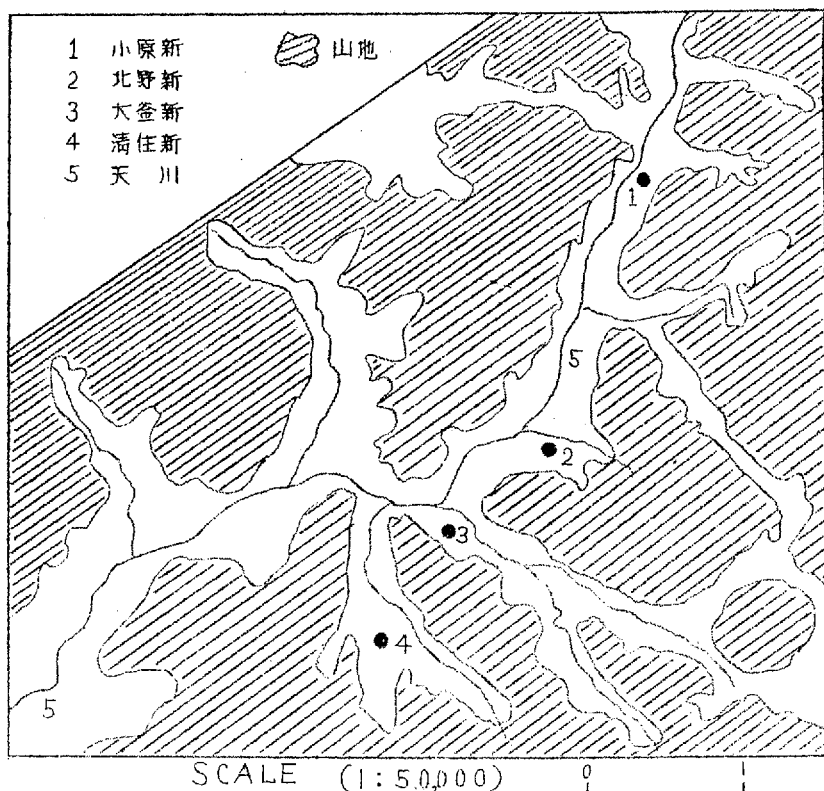
⑧ 開拓の経過

何れの新村も開拓の経過を知る根本的資料を欠くので正確詳細を知るに由ないが、伝承を綜合すれば大体次の如である。

(1) 清住新

元和の頃、姫路藩の落武者、小寺某なるもの此の地に来て、炭焼をなし、四反余りの田を開墾したのに始まると。其の小寺某の小寺某と開拓地の地形の沢とを結びつけたと思はれる小寺沢を名乗る者が一番多く、現在戸数六十六戸中二十九戸をしめているのは此の間の争柄を物語るものとみてよからう。いわゆる隠田百姓村にして、其の容易に内郡をうかがはれぬみごとな袋状の逆Y字状の谷地形はこの種の村に特有の風強い隔絶性の地形を充分

(オ=図) 新田村の地形的位置



に示されている。(オ=図)

其の後だんだん開発も進み、現在では田畑二十三町歩内外となり、主として漁池灌漑により耕作しているが、一方村民も各地より来て戸数も沢山に増加し、明治初年の三十五戸内外より現在は六十六戸となっている。従つて農耕地は著しく不足し、他村へ出作すると共に、副業として單手の製造を営むものが七戸あるが何れも一戸平均二―三人から六―七人位の従業員を家族又は雇用にて得ている程度の家内工業的のものである。何れこの副業については後日詳細に調査して報告したい。

(2) 小 原 新

此の地はもと奥野と称し土質悪く、水もちも悪い故放置されていたが、それより上流には既に大柳、中山(何れも加西郡賀茂村)の村々が開発され、これらの地は土質よく水もちも良い為、天領となっていた。ところが約四百年前、姫路藩の落人、福永助九郎なる者、この奥野の地に乗りて新田を開発し村立をなしたと伝えられる。現在福永姓を名乗る者、十九戸中、七戸あるのは、やはり此の向の舊稱を物語るものと思はれるが、もとより詳細なることは知るに由ない。地形的位置を見ても既に述べた如く、天川流域の最奥の地にして狹長な谷底にあり、隱田村に特有な強い隔絶性を有する位置であることは清住新と同村である。

さてその後、明治二年(1869)加西郡加茂村の善教寺の檀徒嘉大夫なる者、高五石二斗九合の地を開発して移住したと伝えられこの系統の家丁と云はれる中井姓を名乗る者、十九戸中、九戸あり、後、更に附近の山野を開拓して、文化十四年には、高二十七石五斗七升三合となっている。村も初めは小原の垣内であつたが、元禄新帳に初めて小原村の支郷として小原新と名付けられた。

明治十二年頃には戸数十二戸、人口四十人内外であつたとのことであるが現在は十九戸の農家と職林中の疎南者三戸で二十二戸となり、十九戸の農家が水田八町歩、畑二町歩内外を耕作しているのでこゝでも亦著しい耕地不足である。徹物の副業、夏野菜の栽培等収益の高いものを工夫している村であるが、何れ現状については今後の詳細な調査をまつて報告したい。

(3) 北 野 新

元禄の頃、印南郡岸村(西神吉村岸)の人、市兵衛なる者、藩命により此の地を開発し、村民を移住させたのに始まる。この地は大笹の北の谷の稍々広い所故、北野新と名付けられたと。

この初代市兵衛なる人が竹内家の祖先にして、竹内姓を名乗る家が三十一戸中六―七戸あり、これより少しおくれて同じく印南郡岸村より坂口家の先祖が来た村である。坂口姓も五―六戸あり。又この頃、印南郡志方村の人木西某も移住せる由にて、木西姓も現在八―九戸あり一番多数を占めている。その後開拓も進んだであらうが、何れ限られて谷底であり、付近も新しいこととて本字の面積も小さく、現在水田十町四段歩内外であり、戸数の増加と共に著しく耕地は不足であり、隣村の小原、八重畑等へ出作している。

(タ) 大 釜 新

伝承によると、承応三年(1654)本村より東方約一里ばかりなる印南郡畑村(果志方村畑)の百姓、五郎太夫なる者の開発にして、当時八重畑は砥山の麓に広がっていて、村内所有の耕地を全部村民にて耕作する事が出来なかったのも、前記五郎太夫なるものに田畑六町四畝を無償譲与してこの地に移住せしめ、新たに新村を開発させたのが本字であるから、旧幕時代は勿論最近まで大字の土地としては、氏神天満神社境内及び墓地のみで宅地は大釜に属し、耕地は八重畑に属するという顔に不思議な様相を呈している。

元来本字は十圃(トオモチ)と呼ばれていたのは、主なる開発者とされる旧家が十軒あったからだとする事であるが、今は何姓の家がよく分らない。宅地が本字の奥なる大釜の地所であったから「大釜新」と名付けられたと思われるが、勿論前述の様な開拓事情で大釜新とはいへ大釜とはいはゆる親村、子村の關係でないことは明かである。

本村の開発は前述の如く、小原新や、清住新の如く隠田村的なものとは異り、八重畑の田を耕作させる島であったから、谷内村の中央天川沿ひの八重畑の地所の東端にあたり、集落は清住新との間にある二百三十余米の丘陵性山地の北側の山麓斜面の下部に立地し、八重畑より大釜に至る道路の山側に路村状をなしている。前面は天川の谷底の水田に面しているが、前述の如く

耕地の多くは八重畑に属し、現在でも尚本字の耕地は十町歩一十一町歩にして十七戸の農家に対しては不足であり、八重畑に耕作している。

◎ 各新村の古さ(開拓年代)

各新村の開拓年代についての伝承を総合すれば前述の如くであるが果して如何であろうか。根本的資料となるべき文献記録を欠くので、正確に知るに由ないが、一つの指標として墓碑の年代銘をしらべて見ると、オー表の如くである。

オー表 墓碑の年号(古さ)

清 住 新	大 釜 新	北 野 新	小 原 新
延宝九年(1681)	宝暦八年(1758)	元禄十三年(1700)	天明三年(1783) (大 地 蔵)
元禄十一年	安永三年	天保八年	寛政十二年(1800)
文化七年	天明五年	嘉永七年	文化元年
弘化二年	文化九年、十二年	安政三年	文政十一年
安政二年、三年	文政五年、七年	慶応元年	弘化四年
文久二年	天保九年、十四年		嘉永二年
元治元年	弘化三年、四年		安政六年
	嘉永二年、五年		文久二年
	文久二年		
	慶応三年		

- 備考 1. 各新村につき上から古い順に排列した
 2. 最上段の最も古いものの西暦年数を()内に記した
 3. 明治以後のものは省いた

初てオー表によると、清住新では延宝九年（1681）大釜新では宝暦八年（1758）北野新では元禄十三年（1700）、小原新では天明三年（1783）がそれぞれ現存するものの内最古のものとなっている。勿論これら最古の墓碑が開拓者のものであるとわかっているのは北野新のみで、他の新村の場合は不明であるが、少なくともそれより二、三十年以前には開拓されていたものと考えて大差なからうからうから、開拓の年代、又は少なくとも開拓の最下限の年代を知る指標としてとることは差支えないと思はれる。

そうすると、清住新は約三百年前、大釜新は約二百三十年前、北野新は約二百八十年前、小原新は二百年前ということになる。之を伝承の年代と比較するに最もよく一致するのは北野新の場合である。開拓者、初代市兵衛なる人の直系といはれる竹内本家の当主篤二氏の談によれば、この墓碑の年代は新墓地に新しい墓碑を作る際、檀那寺の過去帳につきしらべたら初代市兵衛は元禄十三年正月二十日死亡とあって、まちがひなき由であるから、北野新の開村は約二百八十年乃至三百年程前と見てよからう。

次に清住新は伝承によれば元和の頃として三百三十年程前となり墓碑によれば、三百年余り前となり開拓者が長命の人ならば大体兩年代は一致するから、三百年から三百二十年程前の開村とみてよからう。

又大釜新は伝承によれば約三百年前となり墓碑によると、約二百三十年前となるから約七十年の差があり、開拓者が余程長命の人であったとしても尚約五十年即ち二代位の差があることになる。

最後に小原新についてみると、伝承によれば約四百年前ということであるが墓碑によるとせいぜい二百年から二百二十年位しかさかのぼり得ないので、この間に百八十年乃至二百年の差があることになる。もつともこの最古の墓碑というも実は大地蔵であるから、墓地に穴地蔵が存置せられる様になるのは村が或る程度と、のつて来た頃であろうと思はれるから、開村はこの年代よりある程度さかのぼり得るは当然と思はれるが、今のところその年数を確める資料は見当たらない。従つて小原新の場合は少なくとも二百二十年位前には開村されていたと思はれるがそれ以上何年位さかのぼるかは今後の調査により正確な資料を得てからでないとは決定出来ない。

④ 村民の出身地

各新村の村民が、何れの村から入村したであろうか、ということ即ち新田開発及び其の後の新田経営の労力方としての村民の考察は大切な新村研究の一事項であるが、これについても少数の例外を除いては正確な資料が見当たらない。もつとも本地域の様な狭い内陸山地の谷底や山麓斜面の開拓は三角州平野に於ける大規模な干拓による町人請負新田や藩官新田と異なり、最初は少数の人が来つて草分となり、後戸数の増加と共に切添新田式に開発してきたであろうことは開発の経過からほぼ察せられるが、さて之を考へる一つの指標として檀那寺の所在地についてしらべてみた。

く一般に新村内に寺をもつことは少い。これらの村民の多くは出身地の村の寺の檀家となつてゐる場合が多い。谷内村の新村についてみても何れの新村も寺はなく他村の寺の檀家で

ある。このことは逆に村民の出身地を暗示する場合が多いのである。）

オ＝表 各新村の村民の彦那寺の所在地

新 村 名	彦那寺の所在地	戸 数
清 住 新	印南郡別所村佐土	30
	全 西志方村西牧	4
	飾広郡谷外村志吹	13
	全 花田村加納原田	10 (計66)
	全 全 上原田	8
	全 谷内村八重畑	1
大 釜 新	印南郡別所村福居	5
	全 阿弥陀村魚橋	1
	全 西志方村横大路	4 (計17)
	姫 路 市	3
	そ の 他	4
比 野 新	印南郡西神吉村岸	14
	全 志方村志方	12
	飾広郡御国野村国分寺	1 (計31)
	そ の 他	4
小 原 新	加西郡賀茂村福住	17
	飾広郡谷外村庄 (外に数時中の疎開者三戸 あるもこれは別である)	2 (計19)

(1)清住新(オ＝表)

オ＝表中の飾広郡志吹は明治十一年の市町村制実施前は印南郡に属していたが、旧印南郡についてみれば、六十六戸中四十七戸にして、圧倒的に多数を占めている。次に飾広郡花田村が十八戸でオ＝表二位をしめ、隣りの字である八重畑は僅かに一戸のみにて、距離には無関係である。

(2)大釜新(オ＝表)

印南郡が十七戸中、十戸にて、過半数をしめ、次に姫路の三戸その他四戸となっている。

(3)比野新(オ＝表)

印南郡が三十一戸中、二十六戸で、之も圧倒的多数を占め、飾広郡一戸、その他四戸となっている。

(々) 小原新(オニ表)

最も簡單で加西郡が十九戸中、十七戸で殆んど全部であり、僅かに二戸が飾廣郡である以上を通覧すると、清住新、大釜新、北野新の三新村については、印南郡との関係が深く、特に後の三新村については岡拓殖の出身地についての伝承とよく一致して略々その村民の出身村を示すものとみてよからうと思はれる。もつとも後に出来た分家が本家と同じ寺の檀家となつたり他村から来た少数の者が古い村民の寺の檀家となつたりしてももの若干あるとは思はれるが大体のところはまちがひなからう。殊にこれらの三新村は明治十四年版の内務省地理局出版の「郡区町村一覽」によれば、旧藩制時代から明治二十一年の市町村制実施迄は印南郡に属し、しかもその位置は印南郡の西北端の辺境地帯で印南郡南部からいえば植民地的なところではなかつたであらうか。と思はれる。北野新の岡拓君初代市兵衛は流刑に処せられこの地を開拓して村立をしたとの一説もあるのはこの間の事情を示している称にも思はれるのである。清住新については、最初の岡拓者の伝承とは一致せぬゆであるが、その後の入村者は前述の如き理由で印南郡から入りこんで来たのではなからうかと思はれる。

小原新は前記「郡区町村一覽」によれば前の三村と異り、小原、八重畑等と共に旧幕時代から飾東郡に属し、印南郡との関係は殆んどなく、飾東郡としても東北の辺境に位置していた為、むしろ北隣の加西郡賀茂村福住との関係が極めて深く、亮大夫の開拓の伝承とよく一致する故、これ亦、村民の出身村を示すものとみて大きな誤りはあるまいかと思はれる。

四. 摘 要

以上各内村の新村について今夏の調査に基いて若干の事項について論及したが要約すると大体次の如である。

- (1) 各新村地域は、飾廣、印南、加西、の三郡界山地に於ける新村分布地域の西北部をしめ四つの新村は天川橋道谷に沿って、略々南北方向に分布し、地形的には谷底、谷腹、山脚斜面を開拓したものであり、特に清住新、小原新は斷絶性の大きい地形的位置をもつこと。
- (2) 各新村の開拓の起源については、清住新と小原新は隔絶性の大きい地形的位置に特有な隠田村的な起源をもち、北野新は藩命により、大釜新は八重畑部落がその所有耕地経営上、開村させたものであること。
- (3) 各新村の開拓年代については、北野新は約三百年前、清住新は約三百二十年前となり、それぞれ伝承の年代と最古墓碑の年代がよく一致するが、大釜新と小原新とは伝承と最古の墓碑の年代とは、それぞれ五十年、二百年位の差があるが、少くとも大釜新は約二百三十年前、小原新では二百二十年前位には開村されていたことは年代の明記された最古の墓碑より推定されるが、それ以上、何年かのばり得るかは正確な年数が分らないこと。
- (4) 村民の檀那寺の所在地については、北野新、清住新、大釜新の三新村では、印南郡が大多数又は過半数を占め、小原新では、北隣の加西郡賀茂村福住が圧倒的に多数をしめていること。このことは岡拓者及びその後の入村者の出身地を暗示するものであらうと思

はれること。

- (5)これらの新村は何れも戸数の増加と共に現在耕地不足で隣の字に出作りしていること。
 (6)既に報告した「テルタにおける新田の開拓」と対比すると、テルタの場合には大面積で従って大規模な開拓多く、大資本を要する政町人請負新田又は藩営新田による開拓が多いが、本地域は内陸に於ける丘陵性山地の斜面や、古蹟、賦墾な谷底地域を開拓した小規模な隠田村的な切添、新田式のものの長年月に亘る集積と見てよからうが、この差異の生じたのは恐らく地形的條件が根本的原因であろう。

以上極めて概報であるが何れ今後の調査をまけて詳細を極めたく思っています。

本稿を終るに当り現地において種々御世話になった方々、特に各新村の代表の方々、清住新の飯田老、北野新の竹内鶴二氏及び参考文献の著者に感謝の意を表します。

(1953. 8. 31)

(参 考 文 献)

辻村 太郎	瀬戸内海成因論(飛騨秋記)	昭和15年
山崎 直方、佐藤 伝蔵	大日本地誌 巻四(近畿地方)	明治38年
東本 龍七	日本郡島三角洲の研究、地理教育オ9~11巻	
辻村 太郎	日本地形誌	昭和4年
石田 龍次郎	新田 と其の地名 地理教育オ24巻	
武見 芳二	新泻県における新田集落	オ23巻
矢嶋 仁吉	武蔵野小平村に於ける新田集落の研究	
	地理学評論オ15巻	
全	武蔵野新田集落の研究(オ三報)	
	地理教育 オ27巻	
浅香 幸雄	近世新田部落の土地問題 人文 オ2巻オ1号	
小野 武夫	日本村落史概説	昭和11年
新地理学講座	オ七巻「厂史地理」	昭和28年
内務省地理局	「郡区町村一覽」全	明治14年版
飾广郡教育会	飾广郡誌	昭和2年
印南郡役所	増訂 印南郡誌 前後編	大正5年